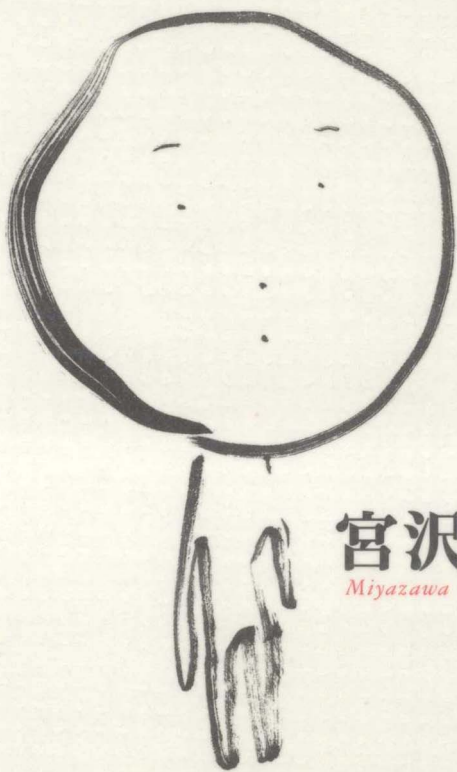




ぼうぜん  
然とする  
技術  
ぎじゆつ



Akio  
宮沢章夫  
Miyazawa



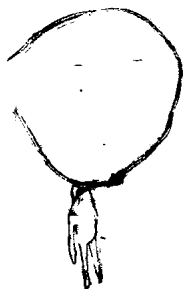
筑摩書房

ぼうぜん                      ぎじゆつ  
茫然とする技術

宮沢

*Akiu Miyazawa*

章夫



...

筑摩書房

宮沢章夫 (みやざわ・あきお)

1956年静岡県生まれ。多摩美術大学中退。

劇作家・演出家。遊園地再生事業団主宰。

エッセイ集『牛への道』『わからなくなってきました』(新潮社)

『考える水、その他の石』(同文書院)

『百年目の青空』(マガジンハウス)

戯曲『ヒネミ』『14歳の国』(白水社)



## 茫然とする技術

一九九九年八月二〇日

初版第一刷発行

二〇〇二年四月二五日

初版第三刷発行

著者・・・宮沢章夫

発行者・・・菊池明郎

発行者・・・株式会社筑摩書房

〒一一一八七五五

東京都台東区蔵前二一五一一

振替 〇〇一六〇一八四二二三

印刷所・・・明和印刷

製本所・・・積信堂

ご注文、お問い合わせ、乱丁落丁本の交換は左記へお願いします。

〒三三三三八五〇七 さいたま市柳引町二一六〇四

電話 〇四八(六五二)〇〇五三

Printed in Japan 1999 © Akio Miyazawa

ISBN4-480-81611-9 C0095

ぼうぜん                      ぎじゅつ  
茫 然   と   す   る   技 術



目  
*Contents*  
次

I・カタカナの方法……………7

パレード。 9

ハロー。 13

スタミナ。 17

デラックス。 21

サービス。 25

ウルトラ。 29

ファミリー。 33

タイム。 37

パワー。 41

コントロール。 45

「ハイキング」と「ピクニック」。

サンキュー。 53

II・茫然とする技術……………57

ぶらぶらする 59

発酵と腐敗 63

商店街往復 67

月末論 71

小走りの人 75

素にもどる契機 79

ほとんど意味のない情報 83

つい口にしてしまう 86

うつむきかげんで歩く人 89

手渡しのメディア 92

でかい声 95

郵便受けはメディアである 98

山武ハネウエルを訪ねる 101

古きよき 106

添え物 109

父権の喪失 113

金沢の雪が見たい 117

観覧したい気持ち 121

### Ⅲ・蹄を打ち鳴らす音よ！

動くとおなかが痛い 125

致命的エラー 128

牛がモーと鳴いた 131

へボな外注 134

プラプラしている 139

顔とコンピュータ 143

横になって読めない 147

二種類の人間 152

コンピュータと熱 157

どうやって押さえるか 160

不可解な音 163

牛もいれば馬もいる 166

便利の陥穽 169

秋葉原の素人 172

笑いが含まれた声音で 175

大人は切り換える 179

Ⅳ・コンピュータと生きて……………183

コンピュータ化の強制力 185

サンブル画像の人 207

人は誰だってビジネスマンだ 188

煙草と猫と父の顔 210

インターネットと沈黙 191

こうした事態に対してジャイアンは 213

インターネットとバニー 195

16倍 217

バナナを皮ごと食う者たち 198

携帯電話の問題 220

人手が足りない 201

微妙なすきまができている 223

底知れぬ欲望の構造 204

さらに大人は切り換える 226

# V・読書する犬……

年齢 231

こんなときじゃなけりや読めない 235

たったひとつの漢字のために 239

熱心な人 243

こぼれ落ちた、暗く熱いもの 247

貧乏力 277

あとがき 281

痛みとは肉体のことだ 251

レコード・コレクターとともに12年 255

カレーと、インド遅れた 259

爆発とよろこび 268

読めない歴史 274

装画 … しりあがり寿  
装幀 … 坂本志保



# I



## カタカナの 方法



## パレード。

ねぶた祭りとは、よくアメリカ人が派手に行く、「パレード」はどこか似ている。だが、誰も、ねぶた祭りをパレードだとは思わないだろう。なぜなら、パレードという言葉の持つ、いかんともしがたい、「あきれた感じ」がねぶたの背景を流れる思想と相容れないからだ。短い東北の夏に燃え上がる土地の人々の煮えたぎるような情熱とエネルギーには、パレードのような軽薄さはどこにもない。

ためしに口に出してほしい。

「パレード」

なんともだめな感じがそこには漂っているのだ。たとえば、朝起きてきた父親が、不意にこんなふうに言い出したらどうだろう。

「父さん、ちょっと、パレードに行ってくる」

思わず、襟首をつかんで止めたくなるだろう。なんとか説得して、思いとどまらせようとするだろう。パレードとはそのようなものだ。だから、プロ野球などで優勝チームが地元の町をパレード

するとき、オープンカーに乗せられた選手たちの、少しはに cand 表情も理解できる。

「なぜ俺は、こんなことをしているんだ」

正直な感想だ。しかも、首からレイをかけている場合もあり、パレードを主催した者、パレードに参加する者、パレードを見に行く者らが作り出す、「ばかばかしいほどあきれた世界」の渦中にある者は、うっかりそれを忘れてしまうこともあり、オープンカーから沿道の人々に向かって手を振るばかりのもいれば、ビルの上から、紙吹雪をまくばかりのもいる。

救いがたい、パレードの構造。

それもこれも、皆、この言葉のせいだ。

「パレード」

やはり、「パ」である。「パ」がいけない。最初に口を閉じ、唇をふるわせ破裂音を出す。すると次の瞬間には、思わず口が半開きになっているのだ。

「パ」

そんな音を発し、口を半開きにした者の姿を想像してみればいい。だめとしか考えられないではないか。

だが、驚くべきことだが、いかにもだめな響きを持った、「パレード」の起源は、「だめ」とは無縁なところにあった。

「軍隊を集合、行進させて司令官などが閲兵するのが原義で、社会主義諸国で行っているリーダーが壇上に並ぶへ赤の広場へやへ天安門広場」などにおけるメーデーのパレードがその直系である」

平凡社大百科事典の「パレード」の項目にはこうあった。ニュース映像などで見ることのできる軍隊のパレードである。規律正しく、力強いあの行進には、「だめ」はみじんも感じられないかのようだ。「規律正しく、力強い」からなおさら、「だめ」を感じる者もいるだろうが、それはまた、べつの意味における「だめ」についての話だ。

さらに、平凡社大百科事典の記述はつづく。

「転じて」

いや、軍隊の説明で充分わかったから、これ以上、なにもいらない。「転じるなよ」と言いたい気持ちもあるし、なにかいやな予感がするものの、まあ、転じさせてやろうではないか。

「転じて、娯楽的形式をとった主として野外で行われる、成員のアイデンティティ、共同感情（国、都市、集団）を促進、高揚させるために行われる催し、ねり歩きをともなう祭り、スペクタクル一般を指す」

これで私は、「パレード」の、正しい日本語訳を知ったのである。

「ねり歩きをともなう祭り」

そして、「だめ」の中心をなす、その正体もこれではつきりとしただろう。

「ねり歩き」

これは、はつきりいって、だめである。だめ以外の何物でもない。なにしろ、「ねり歩く」のだ。右に左に、ふらふらと、目的もなく、ただ先に進み、進むかと思えば、ちよつと止まり、不意に思いついたかのように歩き出すが、急ぐでもなく、あたりをながめ、ぐだぐだした足取り、勢いもな

いまま、そうしてどこまでも歩く人々だ。

かつて、人文字を一般参加者が作り、それを審査するテレビ番組があった。広場に人々が集まり、上空から撮影する。そこには、様々な絵や文字が描かれていた。完成されたものはきれいだったかもしれないが、私には、それをする人々に、気持ちの悪いものしか感じられなかった。

だったら、パレードをやったらどうだ。

もちろん、「軍隊を集合、行進させて司令官などが閱兵するのが原義」といったものではけっしてない。そう、「ねり歩きをともしなう祭り」だ。日本全国から、パレードをする人々が、本会場にあてられた、国立競技場に集まってくるのだ。

ただただ、ねり歩く人々。ぐだぐだと歩く人々。だめがそこにある。そんな、「だめ」を、私は見たいのだ。

ハロー。

あれはもう数年前、四谷で電車に乗ろうとしていたときのことだ。  
背後から声をかけられた。

「ハロー」

そんな挨拶をする人を知人に持った覚えがなかったので戸惑ったが、見れば、かつて一度だけ仕事をし、その後、仕事以外の場所で何度か会ったことのある編集者だ。さらに、編集者は言った。

「ハロハロハロー」

私は「ハロー」の用法について無知なので、「ハロハロハロー」が正しいかどうか分からないものの、「ハロ」を反復するその言い方になにか不愉快なものを感じた。なにしろ、「ハロハロハロー」だ。たいていの言葉は、二度、反復すると軽薄になる。

「ハロハロ」

この場合、軽薄さもあるものの、調子のよさがそれを救い、まあ、すすめられたものではないが、許せる範囲の表現になるだろう。では、三度はどうか。

「ハロハロハロ」

ばかものにしか感じられないのだ。これはなにも、英語に限ったことではなく、「はい」を例に考えればわかりやすいように、なんにせよ言葉は、「三度はどうもいけない」ということが示されている。「はいはい」と繰り返して返事をする者がいれば、ふざけているのかと腹立たしい気持ちになるが、これがひとたび、二度になったとしたらどうか。もつと異なる印象がそこから生まれる。

「ハイハイハイ」

ひらがなではなく、ついカタカナで表記したくなるのも奇妙だが、それほどここには、「ばかもの」としか考えられないなにか」が存在する。

ところで、「ハロー」、つまり、「hello」を、手元にある、研究社『新英和・和英中辞典 CD-ROM版』でひくと、

1 「遠くの人への注意を引くのに用いて」お（ー）い！ もし！

2 「あいさつに用いて」やあ！ よお！ こんにちは！

3 【電話】 もしもし！

4 「驚きを表して」おや！ あら！

ということになっている。

あの三度はいったいどの用法なのだろう。「おいおいおい！」だろうか。だとしたら、ひどく失